鹿児島戦記
第五
篠田次郎編
加々吉版

A432
4

篠田仙果 著
永島孟亟 画

繪本 鹿兒嶋戰記

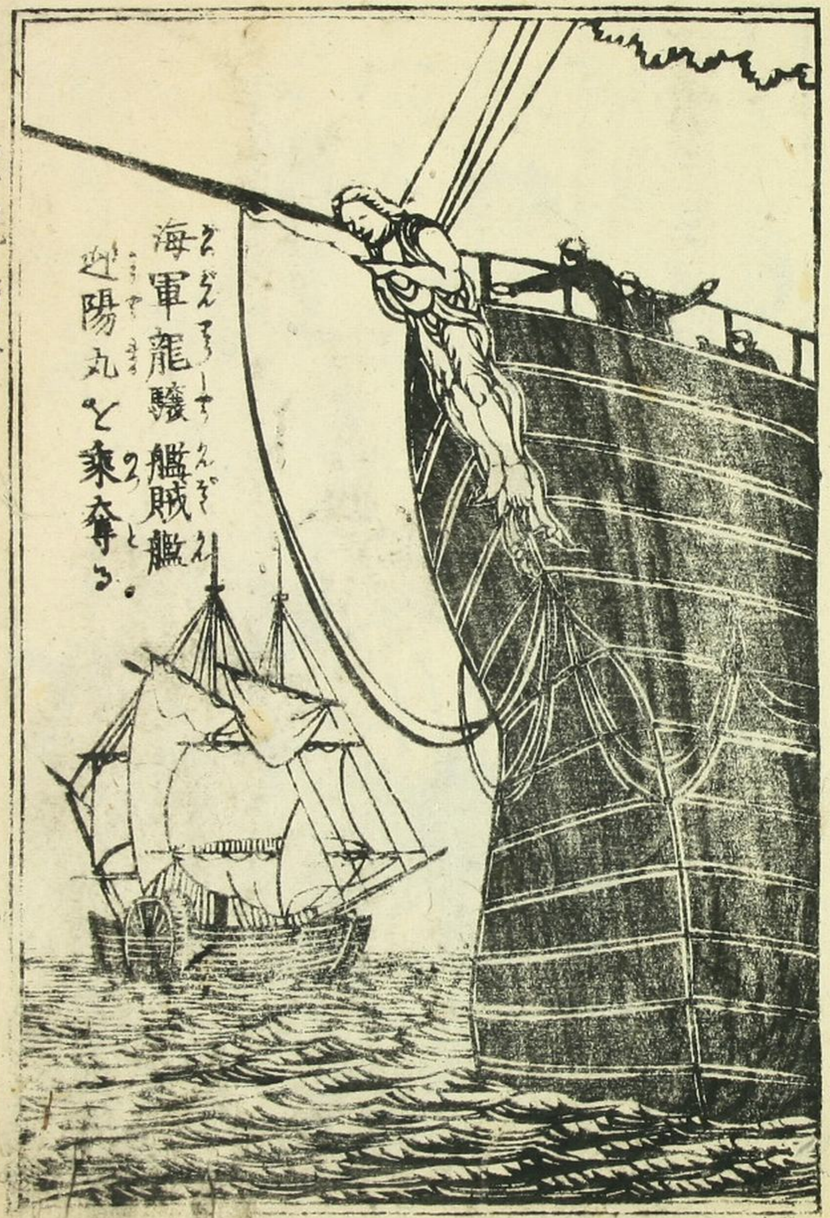
東京 青盛堂 板

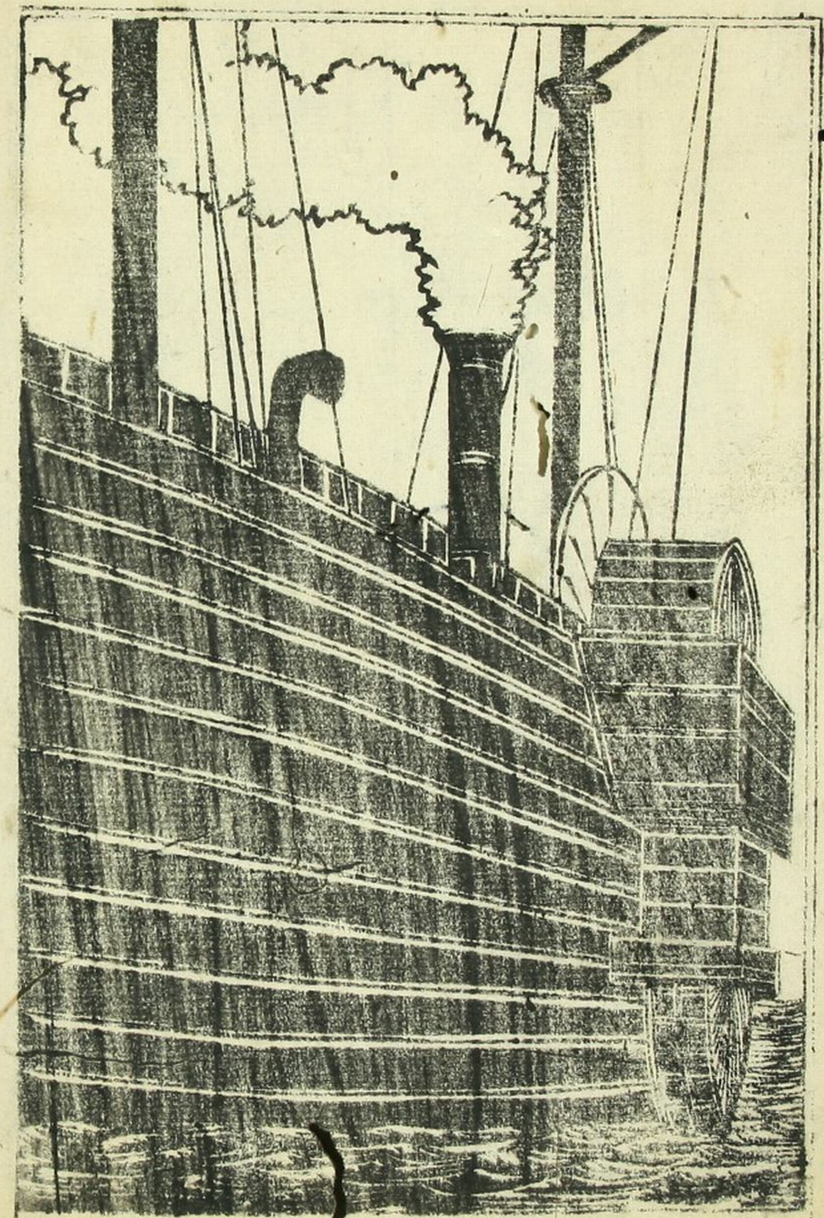
緒言

今般鹿兒島の事發るや都鄙の老若男女と云ぞ耳を側立唾と呑て顛末如何と待て其機を察して加賀屋の主人が童幼も解し易きやう綴じこめ往文の内國新聞數十種より抜章して數卷とのべ速と旨と色僅一夜に編纏ひ校正の暇もなく只孟齋の猛なる毫を頼て書の如しと而云

明治十年三月

篠田仙果


海軍龍驤艦賊艦
迅陽丸と乗奪る。



薩兒島戦記三編上之巻

東京 篠田仙果録

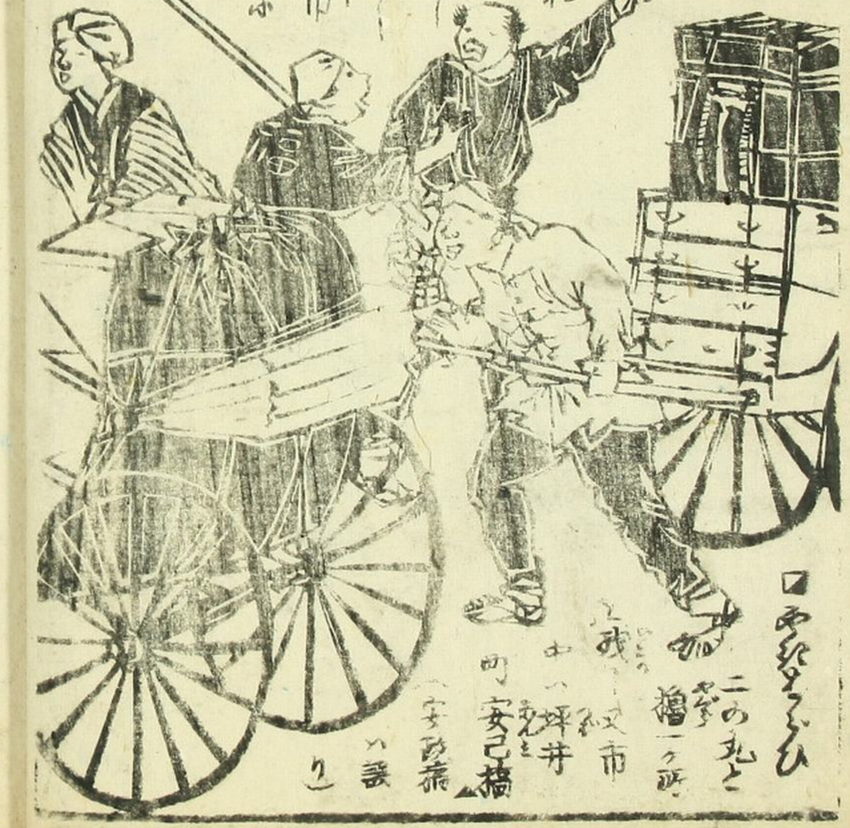
茲ふ熊本鎮臺の司令官
公陸軍少將ハ薩兒島の
暴徒ら人吉 水俣
西街道へ押出しゝる
よし聞まゝ扨ハ暴徒ら
此処ふ迫り熊本城をとる
落し根拠よあらん心と
思ふ然らば狭き場
所ゝ戦ひ勝ても自在
ならぬそれふかつて城下の
人家あらぶ水丸を焼

▲ちゝと
獨断をふ
決しられば
其趣き縣
廳へ報しなり

布達
ふ及び
同じ市
中の者

熊本縣廳より明十九日
正午十二時までふ市中の
者ども立退べしと至急

狼狽周章大さわぎ
雑具を荷ひ出もの
なれば包を負ひて
走るも老人は杖よ
すがり泣子は母ふ連られ
丈ひくき男は走るとの
遅きを恨み横太肉せ
女子は轉がるかぞまし
あらんと思ひ実よ市
中の混雑は喩ふ
ことあらばこそ
僥倖と沿ひものは
人力車を負者どもそ



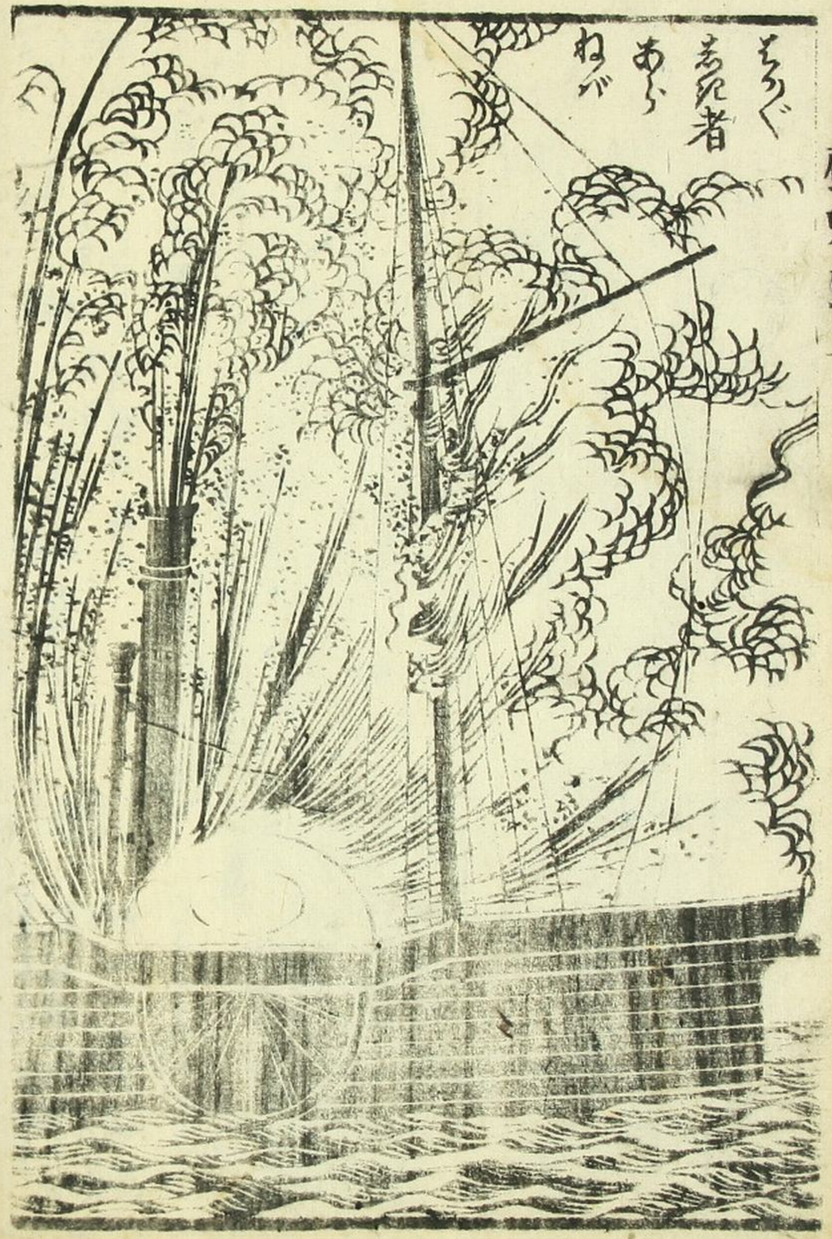
□あらそひ
二の丸と
櫓一ケ所
城一紋市
ハ坪井
町安己橋
（安己橋）
ハ長
り

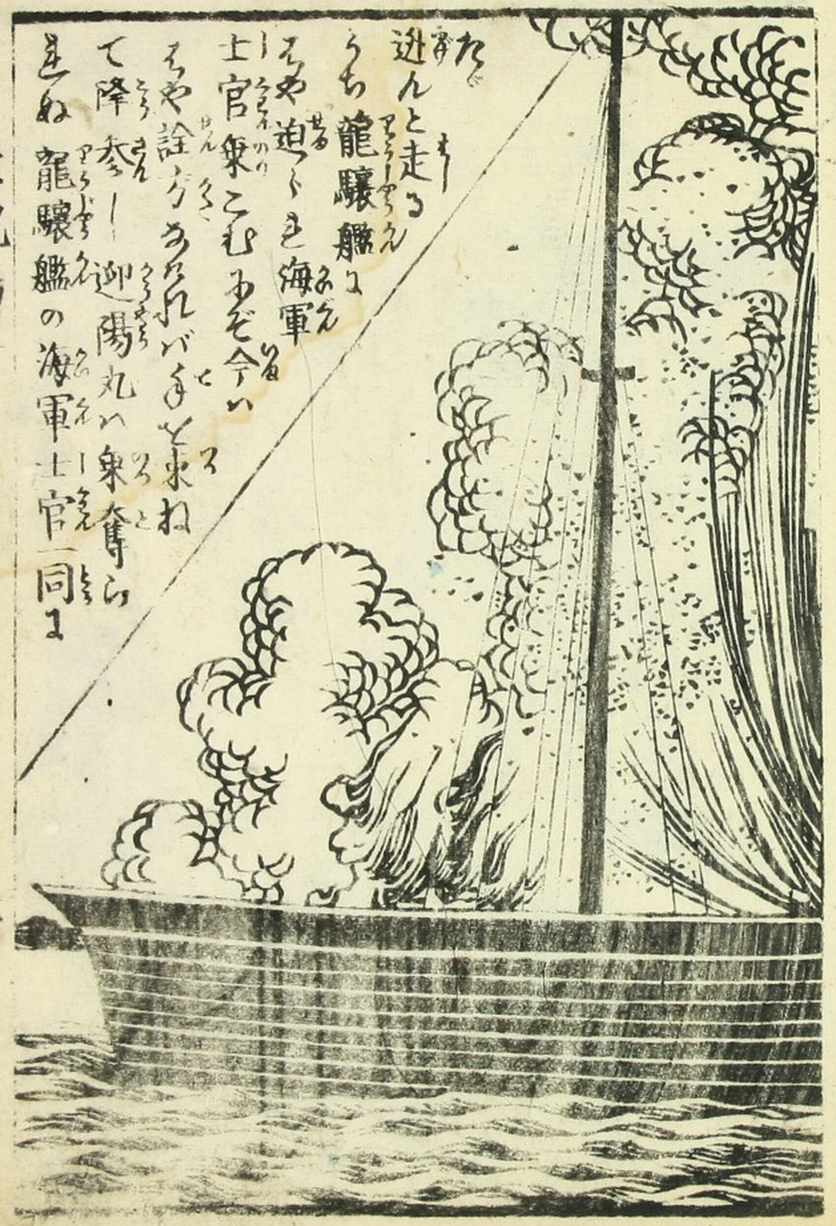
道の遠近かかつてつ
一日か雇ひ料二四六七
十銭四五貫之の者よ
人力車を賃
かつてあど難義よ
及ひ〻ゑび巡査
れを厚く保護
□貧者ゆい車の賃
とあつて立退せ
多あんあり出さそ二月
十九日十二時三十
熊本城は水丸ゑびよ
天守ホのこらず □

兵をそなへて待ち
ゐり○前編まる記
せ〻ゑて籠城の

手當をして三十余日の蓄藏
○扨又暴徒らが持舟
迎陽丸野茂丸舞鶴丸
とて三艘の荒船
右の船にて
の物品の運送と
迎陽丸に大砲十二門彈藥
兵粮等
鹿兒島
港と出帆
肥後の國
谷陸軍少將
日奈久岬
海軍の

八代に入港し積し品は陸揚なり
櫓彈薬兵粮を運送のため
とう急ぎ鹿兒島表へのぼらんと肥前の國天草沖
龍驤艦は此海上を固めのため碇船
☒扨は賊船追討とあげ直地暮は
迎陽丸の跡を追ひ
昔は船に水夫の





勇を進め野茂丸舞鶴丸の二艘とも奪ひとり野茂丸い焼ぬけて舞鶴丸ハ機関をこわ物の役に立たぬ絶その後八代の海しハ鳳翔艦と右の迎陽

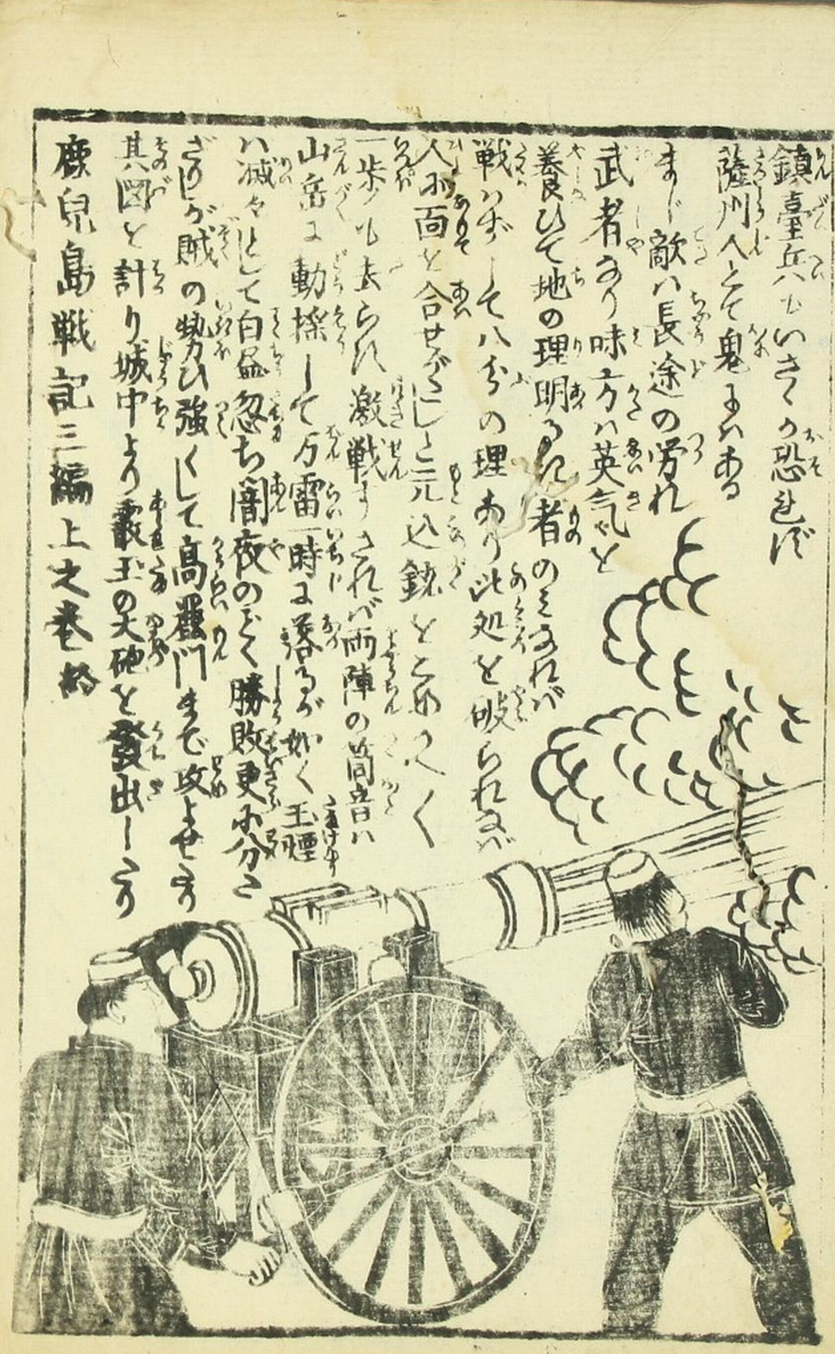
篠原國幹

丸まで固め茂木の沖ハ難波丸と金華丸まで

図自ら陣頭に馬を進め最も激しく令を下せば薩児島たちの薩元猛者たく操り踏ちらせと難波をつく押せそう

忽ち兵を三手に分け二手の兵は
前後に廻り一手の兵は
虚をとらんと敵の横を討んと
其外は引の自在なる
こと千五百の兵
卒を我が
足の如く
おつかひ
此処ろ
破り

鎮臺兵はいさてゝ恐るべ
薩州人こそ鬼まさるあり
まづ敵は長途の労れ
武者ぶり味方は英気と
養ひて地の理明らかなる者のそなれば
戦ひ勢ひ八方の理あり此処を破られば
人形面と合せがたしと元込銃をこめうく
一歩も去らず激戦すれば両陣の間音は
山岳を動揺して万雷一時に落るかゝ玉煙
は滅々として白昼忽ち闇夜のごく勝敗更に分さ
ざるの賊の勢ひ強くして高麗門まで攻よせう
其図と計り城中より霰玉の大砲を發出しう



薩賊島戦記三編上之巻終

010190510390

吉田愛三